The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	出原隆俊先生をお送りする
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70979
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

出原隆俊教授近影

2016年 9 月 6 日、研究室旅行

枯木灘にて

（撮影：新井由美）

出原隆俊先生をお送りする

飯倉洋一

出原隆俊先生をお送りする時が来た。私が赴任した二〇〇一年、先生はまだ四十代だったのだから、本当に時の流れの速さに今さらながら驚かされる。国文学研究資料館でお会いしたのが最初だったと思うが、その第一印象は、私の抱く近代文学研究者のイメージそのものの方だなあというもの、つまり「気難しそうでありながらさりげなく優しい含羞の人」である。

私が初めて出席する教授会開始前。もちろん私は緊張していた。そもそもどこに座ればいいのか？その時、出原先生が、ご自身の隣か前の席を指さした。私の名札をそこに置いてくださっていた。会議開始より少し早めにいらっしゃった先生は、私の席を確保しておいてくださったのである。それが、どれだけ私を安堵させたことだろうか。感謝とともに一生忘れられない出来事である。

出原先生のご研究の間口は広く、さまざまな作家の作品を論じる。しかしそれらは、みな名作と言われるものである。そこに出原先生の矜持のようなものを感じる。佐竹昭廣先生、日野龍夫先生、そして信多純一先生や上野洋三先生の著述に見られる、広い学識に基づき、緻密な実証的研究方法をとりながら、大胆な仮説を唱えるという、京都大学国文の学風に私は強い憧れと畏敬の念を持っていたが、出原先生の研究もまたその系譜に連なるものではないだろうか。

私は是非、先生の御論考を論文集としてまとめていただきたかったので、日本文学・国語学の先生方、そして柏木隆雄先生ま

で巻き込んで、論文集のタイトルや構成を勝手に考える会と称して、立峰というお店で宴会まで開いたことがあった。蜂矢真郷先生など、『日本近代文学の対流』というタイトルだったか、メールで私に送ってきてくださった。しかし、先生の業績が多岐にわたるために、なかなかこれというタイトルが決まらない。結局は、先生ご自身が決められたのである。『異説・日本近代文学』とはこれ以上ない素晴らしい命名であった。以上は、あるいは私の記憶違いがあるかも知れないが、出原先生論文集公刊というミッションが、愉快なプロジェクトであったことは動かしがたい事実なのである。

ところで、その論文集を出原先生は博士請求論文として提出された。主査だけは御免蒙りたかったのであるが、清水先生が固辞されたということで、私がせざるを得なくなった。潜越この上ない話だが、御指名とあらば、致し方がないだろう。ともかくも先生の諸論文を一字一句精読する機会を与えていただき、私にとってこの上ない勉強になった。

先生は、留学生を含む多くの学生を指導され、彼らの多くは立派な社会人として活躍しておられる。また優秀な研究者を何人も育てられ、そのお一人が出原先生の後を継ぐ形になったことは、先生にとっても喜ばしいことだったろう。先生は、学生に対しては決して馴れ合いにはならず、院生発表会などでは、「ここまで言うのか」というくらいに厳しいコメントを述べることがしばしばあった。しかし学生と一対一になると、優しく接しておられるのだと聞いたことがある。教え子たちがどれだけ先生を尊敬しているか、彼らの目を見ればそれがわかる。

酒を愛する先生が蝦蛄に拘りを持つこと、その暗算能力が電卓より早く正確なため我々から厚く信頼されていることなど、まだまだ先生について語ることは多い。一方で、私の知らない先生の素晴らしさは、もっとたくさんあるに違いない。

本当は、斎藤理生先生が送辞を書くのに一番ふさわしい方だと思う。しかし、出原先生は、日本文学・国語学すべての教員・同僚の敬愛する先生なのだ。私がしゃしゃり出て、蕪辞を連ねるのも、その気持ちを表したいからに他ならない。

これからも、引き続きご指導を仰げますことを、心より祈念して、送る言葉に代えさせていただきます。本当にありがとうございました。